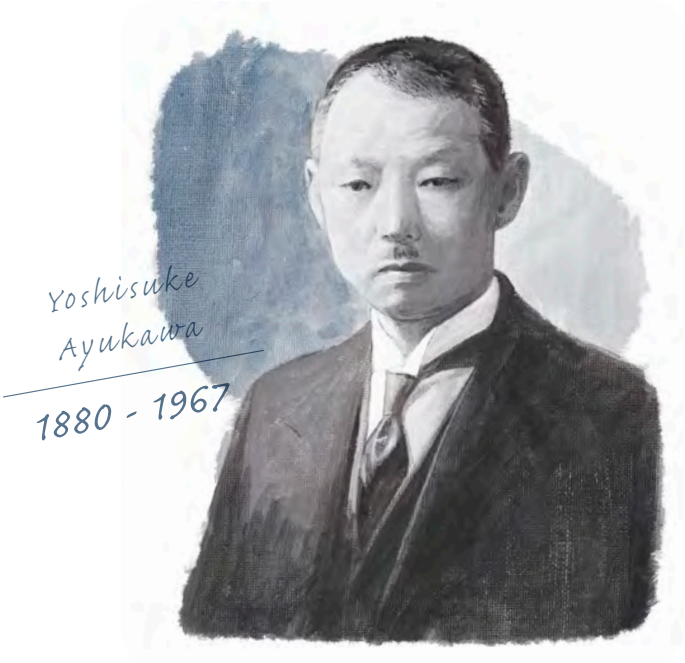
第 II 期

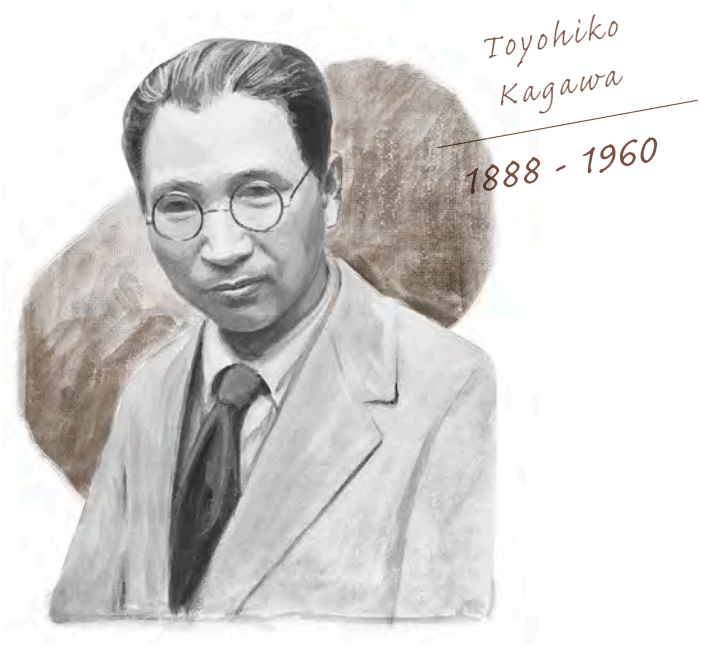
遅れた列強入りと、その中での生き残りを賭けた時期

1904：日露戦争 ― *1945*：敗戦

新たな成長か、格差是正か
産業発展の次を見すえた社会リーダー

鮎川義介（あゆかわ よしすけ） と 賀川豊彦（かがわ とよひこ）





身分を隠し、一介の職人からスタート
独立自尊の精神で事業家となった

伝道、労働運動、協同組合運動を通じ
“ 弱き者 ” の救済と組織化を実践

日本が近代国家への道を確実なものとする契機となったのが、1905（明治 38）年の日露戦争の勝利だった。
当時の社会リーダーといえば、その “ 大事業 ” を成し遂げた政治家、軍人が頭に浮かぶが、
あえて、われわれは別系統のリーダーに着目した。当時は、日本資本主義の勃興期であり、
産業革命を経て、新たな企業が陸続と誕生した。その流れをプラスと考え、加速させようとした実業家と、
逆に、その流れに取り残された人々に着目、その厚生に生涯を捧げた社会運動家を取り上げる。
前者、鮎川義介はエンジニア出身。たった一人で、ゼロから企業グループをつくりあげた戦前屈指の実業家だ。
一方の賀川豊彦はキリスト教の敬虔な牧師。貧民や弱者の立場に身をおき、若い頃はスラムに住み込むほどの
“ 現場の人 ” だった。さらに労働運動家にして反戦活動家でもあり、消費組合活動にも貢献した。
経済発展に光を見るのか、影を見るのか。
それはその人間の個性であり、その個性は生まれた環境によるところが大きいようだ。

参考・引用文献に関しては各期ごとの終わりにまとめて掲げる

産業発展に“光”を見た鮎川と“影”を見た賀川
信念に忠実に、自らの足で立ち上った２人

鮎川義介（あゆかわ よしすけ）の前半生

Yoshisuke Ayukawa

- 1880［明治 13］ 1歳 11月6日、鮎川弥八の長男として山口県山口市に生まれる
- 1890［明治 23］ 11歳 8月、山口カトリック教会にてビリヨン神父より洗礼を受ける
- 1892［明治 25］ 13歳 4月、山口県立山口尋常中学校入学
- 1896［明治 29］ 17歳 4月、井上侯還暦記賀会が山口市菜香亭にて開催され、出席する
  この頃、井上の勧めにより、北条時敬（当時、山口高校教頭）の校宅に寄寓する
- 1897［明治 30］ 18歳 7月、山口県立山口尋常中学校卒業
- 1898［明治 31］ 19歳 山口高校校長、河内信朝宅に寄寓。同宿舎には上流家庭の子弟が住み込んでおり、彼らに共通した心理に疑問を感じる
- 1900［明治 33］ 21歳 7月、山口高等学校第二部卒業。東京帝国大学工科大学へ進学のため上京し、麻布内田山の井上侯爵邸に寄寓する
- 1903［明治 36］ 24歳 7月、東京帝国大学工科大学機械科卒業
  9月、無名の職工として芝浦製作所入社
- 1904［明治 37］ 25歳 この年、「井上伯工場巡視録」を読み、自ら東京府内外の工場見学を始める
- 1905［明治 38］ 26歳 9月、芝浦製作所退社
  11月、横浜より出帆、アメリカに渡航
- 1906［明治 39］ 27歳 1月、バッファロー市外のグルド・カプラー社に入社。その後、キリー市のマリアブル・アイオン社にて実地研修を行う
- 1907［明治 40］ 28歳 2月、日本に帰国する
- 1908［明治 41］ 29歳 3月、再び欧米に渡航し、鋳物事業の視察を行うとともに、鋳物工場用の鉄骨建築および諸機械を購入
  4月、ニューヨークで病を発し、治療のためヨーロッパに渡る
- 1909［明治 42］ 30歳 9月、日本に帰国する
- 1910［明治 43］ 31歳 6月、戸畑鋳物を福岡県下に創立、専務取締役兼技師長に就任

※ 年齢は、数え年で表記しています

賀川豊彦（かがわ とよひこ）の前半生

Toyohiko Kagawa

- 1888［明治 21］ 1歳 7月10日、賀川純一の二男として神戸市で誕生
- 1892［明治 25］ 5歳 11月、父・純一、赤痢で死す
- 1893［明治 26］ 6歳 1月、母・かめ、死す
  4月、徳島県板野郡堀江村第二堀江尋常小学校に入学
- 1900［明治 33］ 13歳 4月、県立徳島中学校に入学
- 1902［明治 35］ 15歳 宣教師C・A・ローガンに英語を学ぶ
- 1903［明治 36］ 16歳 4月、賀川家が破産し、叔父の家に移る
- 1904［明治 37］ 17歳 2月21日、宣教師H・W・マヤス博士より洗礼を受ける
- 1905［明治 38］ 18歳 4月、明治学院高等部神学予科に入学
- 1907［明治 40］ 20歳 3月、神戸神学校への転校を決め、開校の9月まで岡崎教会、豊橋教会で伝道を手伝う
  8月、路傍伝道41日目で発熱喀血し危篤
- 1908［明治 41］ 21歳 1月、三河の蒲郡で9カ月の保養生活
  9月、神戸神学校に入学
- 1909［明治 42］ 22歳 9月、神戸葺合新川で路傍伝道を始める
  12月24日、スラムに入る
- 1912［明治 45］［大正 1］ 25歳 11月、スラム内に一膳飯屋「天国屋」を開業
- 1914［大正 3］ 27歳 8月、プリンストン大学とプリンストン神学校入学のため、渡米。丹波丸で神戸を出帆
- 1916［大正 5］ 29歳 8月、ニューヨークのスラムを視察、労働者の示威運動に出合い、日本における労働組合設立を誓う
  10月、旅費稼ぎのため、ユタ州オグデンの日本人移民会の書記に就職
- 1917［大正 6］ 30歳 3月、雇い主の横暴に対して小作人組合を組織し、争議を起こして勝利
  5月、帰国して横浜に上陸、神戸新川に帰る

Ayukawa

貧乏だが、教育熱心だった元士族の家で育つ

鮎川義介は 1880（明治 13）年 11 月 6 日、現在の山口県山口市で生まれた。

鮎川家は代々、毛利家に仕えた武士の家系であり、父・弥八は鮎川家十代目にあたった。弥八は一時、軍人を志願し、郷土の先輩である大村益次郎のもとでフランス式の教練に参加したが、虚弱であったため、厳しい訓練に耐えきれずに挫折してしまう。結局、故郷山口に帰り、県の役人となった後、防長新聞社で採用され、校正兼会計の仕事を得た。

一方、母・仲子は明治の元勲、井上馨の姉の二女、つまり姪にあたる。

鮎川義介が生まれた頃の鮎川家は長州「貧乏士族」の典型で、生まれた時にうぶ湯を入れておくために使うタライも仲子の実家から持ち込まなければならないほどだった。結局、鮎川は 7 人兄弟の 2 番目で、上に姉がいる長男となった。

とはいうものの、さすが武士の家、鮎川家は教育熱心であり、何とか金を捻り出し、鮎川を 6 歳の時からキンダー・ガーテンと名付けられた、今でいう幼稚園に通わせた。

明治維新の原動力となった長州（山口県）は、薩摩（鹿児島県）と並んで西欧文化の摂取に力を入れ、東京から一足飛びに新しい文物が導入されることが多かった。キンダー・ガーテンもそのようなものであり、教育法はすべて西洋式で、先生も、当時の女子教育の最先端、東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）出身の才媛を 2 人も擁していた。

小中は地元の学校に通う。成績のよい優等生というよりは腕白（わんぱく）が優（まさ）っていた。

11 歳の時、それまでの浄土宗から突然、何を思ったかキリスト教に改宗した父の命令で、学校とは別に、山口在住のカトリック神父ビリヨンのもとに通い、英語を学ぶ。フランス訛（なま）りの英語だったが、ビリヨンの教会で実用英語を学ぶことができ、これが後に大いに役立った。洗礼も受け、霊名をフランシスコ・ザヴェリヨという。

ビリヨンの部下だった日本人伝道師から、中国の通俗歴史書である『十八史略』などの漢籍も学んだ。以後 60 年間、ビリヨンと鮎川との交流は続く。ビリヨンは名門の出であるにもかかわらず、進んで苦難の道に進み、思いついたことはどこまでもやり通す。そういう敢為の思想の持ち主だったから交際を続けた、と後に鮎川は語った。ビリヨンもまた後に、よき相談相手として、著名な実業家となった鮎川を頼った。彼はその後、日本で生を全うする。

貧しさをバネに立身出世に目覚める

ともかく、貧乏な家であった。鮎川は長男で、2 男 5 女の家だったが、収入は父が稼ぎ出す新聞社の給料だけだったため、子供が増えるたびに生活が苦しくなった。

中学 3 年の時である。当時、肩被いのついた外套の一種である「インバネス」という紳士用のコートが流行った。しかし、鮎川家にはそれを買う金もないので、弥八は買わずに我慢していた。妻の仲子は夫をあわれに思ったか、ある時、鮎川を呼びよせ、手紙を書いてくれ、という。誰にどんな手紙を、と鮎川が問うと、仲子はこう言った。「東京の妹あてに、お手元にインバネスの使い古しがあったら弥八あてに頂戴したい、という内容を代筆してくれ」と。東京の妹とは、仲子の叔父・井上馨の養子・井上勝之助の妻である。もちろん、金持ちだ。

しばらくすると小包が送られてきて、開いたら本当にインバネスが入っていた。ただし、こちらからの要望通り、上等だが着古した中古品だ。弥八は妻が物乞いしたものとは露知らず、仕事着と

して利用した。

鮎川はこの時、こう決意した。「自分が逆の立場なら、お古を送りはしない。その代わりに、お好きなインバネスをお買いください、と金を送るだろう。貧乏の苦しさを知らない人は思いやりがない。が、人間とはそういうものなのかもしれない。よし、わかった。俺は立身して金持ちになってやる。もらう側ではなく、やる側になってやる。そっちのほうがずっと幸福だろう」

このできごとについて、鮎川は後年、こう振り返る。

親を楽にするため、自分はなんとかしなくてはいけない、こうした思想の芽ばえが私をして一途に“立身出世”の曙光に向かってわき目もふらず足を早めさせたものと思われる。もともと立身出世の教義は儒教の小乗である。それは今日（引用者注：1966年時）では排他的利己主義としかうけとられないかもしれないが、あの時代の立身出世は、国家や社会をよくするには、まず一家からはじめなければならないという美徳の代名詞になっていた。幸いにわれわれは、元老というよき指導者に恵まれた。なかんずく井上侯の育英の面についての力の入れ方は抜群であった。わけても親類であった私は、自然その恩沢に浴する機会が多かった

ここでいう井上侯とは井上馨のことである。井上が生まれたのが1835（天保6）年であったから、鮎川より45歳年上の頼れる大叔父であった。

Column

井上馨と防長教育会

井上馨は1835（天保6）年11月28日、周防国吉敷郡湯田村字高田に生まれた。同じ長州藩士であった高杉晋作、伊藤博文らと計り、明治維新を仕掛け、成功させた。維新後は、政府の参与として外交および財政の要職を担う一方で、実業界でも活躍。特に三井との関係を深め、後に最高顧問となる。

維新後、しばらく薩長優遇の藩閥政治が続いた。当時、政府内で自分の意見が聞き入れられなかった場合、政治家はすぐに職を辞した。またすぐに別の口がかかるからである。それは悪いことでもあったが、いいこともあった。政治家が郷里に帰って、息抜きができることだ。息抜きといっても晴耕雨読の毎日を送ったわけではなく、多くの政治家が青年の訓育にあたった。優秀な人材が生まれれば、また自藩から有望な後継者を中央に送り出せるという考えがあったからだ。

井上も熱心に訓育を行った。帰郷するたびに、若者を旅館に集め、滔々（とうとう）と天下の情勢を説いた。

山口県の教育史を語る際に、欠かすことのできない組織が防長教育会である（防長は旧国名で、今の山口県の西部・北部を指す長門と、東部の周防をあわせた言葉）。

その発端は、1884（明治17）年に当時、外務卿だった井上馨が帰郷した際、長州藩最後の藩主・毛利元徳から依頼され、県下の学校状況を視察したことにあった。当時は西南戦争に端を発したインフレ対策、松方デフレの影響をもろに受け、困窮した旧士族の子弟は教育も満足に受けられない状況にあり、井上は体制の不備と運営資金の不足を痛感、そのことを毛利に報告する。それを聞いて、毛利が設立を決意したのだ。

同会ホームページによると、防長教育会は山口県の教育振興を目的に、旧藩主・毛利元徳の提唱の下、毛利家、芳川家はじめ2千300余名からの多額の寄付金をもとに、1884（明治17）年10月に創立された日本国最古の民間奨学団体の一つである。会長は毛利元徳、馨が顧問に就任した。その寄付金総額は1889（明治22）年末には45万円に達した。明治20年度の山口県の一般会計歳入額42万7000円を上回るほどの巨費であった。

その規則第一条にこうある。

本会は防長二州ノ学事就中（なかんずく）中学以上ノ教育ノ改良上進ヲ翼賛スルヲ以テ目的トス

その裏には、「山口の小学校教育レベルは全国でも中位にある。しかし、中学校になると、規模、学則、教員、生徒数など寂しい限りだ。私としては故国・山口県の学事をこのような状況に放置しておくことは忍びない」という毛利元徳の思いがあった。

創立当初の13年間は、防長教育会が山口県内の5つの県立中学校の運営管理を引き受けたが、その後、1897（明治30）年9月までにこれら5つを山口県に寄付、現在はそれぞれが県立高等学校となっている。

また、1888（明治21）年には山口高等中学校（その後、山口高等学校と改称）を設立し、その運営管理をしていたが、さすがに財源が逼迫（ひっぱく）し、他府県からの入学者増という現象が起こったことから、こちらも曲折を経て1905（明治38）年に国に寄付、官立山口高等商業学校へと改称され、現在の山口大学経済学部の基礎となっている。

井上は当時から実学の重要性を認識していたようだ。1889（明治22）年9月28日に行われた山口高等学校予科の第1回卒業式で、次のような訓示を述べている。

教育とは家訓即ち英語に所謂（いわゆる）ジシツプリンにして、親の成すべきこと、子の成すべき義務、兄弟の成すべき事柄等なり。此ジシツプリンなからんには、如何（いか）に高等なる学問を修むるも寸効なく、人をして恰（あたか）も球を抱て淵に沈むの歎あらしめんのみ、兎角（とかく）世間には少しく学問せば、直ちに老人は無知無識なりとし、父兄を軽蔑するの弊害あり、此ジシツプリンなき者は、仮（たと）令ひ如何程の学問ありとも、恰も舵なき船の如くにして、毫末の利益もあらざるべし

ここでいうジシツプリンとは、discipline（鍛錬、規律、自制）のことに他ならない。

防長教育会の恩恵に与（あずか）り一流の教師陣から学問を学ぶ

井上が顧問をつとめていた防長教育会（コラム参照）が管轄する山口高等学校に鮎川も通った。防長教育会は一流の教師を中央から招聘（しょうへい）するために、惜しげもなく金を使った。

鮎川の記憶によれば、次のような多士済々が彼の在学中、同校で教鞭を執っていた。教頭の岡田良平（のちに文相）、数学の北条時敬（ときゆき）（のちの学習院院長）、松本源太郎（のちの東京女子高師校長）、丘浅次郎（生物学）、林泰輔（漢学）、戸川秋骨（英語）、西田幾多郎（ドイツ語）などである。

このうち、鮎川が最も影響を受けたのが丘浅次郎であった。山口高校で一番年少の教師で、試験のやり方が他の教師とは一風変わっており、「カンニング OK」だった。「社会に出てわからないことがあったら、どんな本を読んでも差し支えない。私の試験も同じだから、教室にどんな本を持ち込んでも構わない。ただし、私は諸君がどんな本を見てもわかりっこない問題を出す」ということだった。書物をいくらたくさん読んでも、それを理解して使うだけの頭を持たなければ役に立たない。鮎川は尊敬する先生からそれを学んだのだ。

「エンジニアになれ」という大叔父の言葉に感化、上流階級の中で違和感を覚える

当時の士族出身の青年はその多くが軍人志望だった。次が政治家であり、実業家やエンジニアはまったく人気がなかった。ある日、井上馨が山口高校の講堂で学生を前にこんな話をした。「今の日本には政治家が多すぎる。わしも政治家になったのは間違いだった。諸君は国の富を増やす実業家になりたまえ。（山口県内にあった小野田セメントの開祖）小野田の笠井順八のように」。

しかも、講話終了後、宿泊先に鮎川をわざわざ呼び寄せてこう言った。「お前はエンジニアになれ」と。

鮎川はこの言葉に感化された。英語の辞書でエンジニアを引くと、技術屋と出ている。それからエンジニアという言葉が耳から離れなくなった。

数日してもう一つ、井上は言い残した。「わしが話をつけておいたから、明日から山高（山口高校）の北条教頭の宿舎で寝起きせよ。他人の飯を食わんと人間になれんでのう」

鮎川が行ってみると、山高の先輩が既に二人暮らしていた。二木謙三と吉本清太郎である。二木は後に医学博士となり、玄米食の効能を大いに提唱する。吉本も医者となり、赤十字病院内科部長になった。北条の直接の弟子だった西田幾太郎も同家に気やすく出入りしていた。無精ひげを生やした言葉数の少ない人で、後に西田哲学を打ち建て世界的に有名な学者になろうとは鮎川は思いもしなかった。

ところが、1年も経たずに北条教頭は金沢に転任となったので身を寄せる先がなくなる。次は中学の教頭である田村佐衛士宅に居候することになったが、その期間は案外短く、最後に山口高校の河内信朝校長の家に落ち着いた。

そこには日露戦争当時の満州軍総参謀長・児玉源太郎の長男、陸軍大将で後に首相になった桂太郎の長男、日露戦争時の大蔵大臣・曾禰荒助の長男など、長州きっての名流名士の子弟がごろごろしていた。彼らは「東京にいては一人前になれない」という井上馨の持論によって、“山口下り”となった者たちだった。同宿の仲間として彼らと付き合ったものの、鮎川は彼らに違和感も覚えた。優れた知識を持っているが、己れを守るに汲々とし、他人のことにはあまりに無関心だと。功成り名を遂げた人士の家庭はどこか変だ、そう感じ取ったのである。

立身出世への疑問が芽ばえ あえて一介の職人になる

山口高校を卒業した鮎川は井上のアドバイス通り、東京帝国大学工科大学機械科に進学する。下宿先は麻布の井上邸であった。

大学時代は瞬く間に過ぎた。製図をはじめ、エンジニアになるための基礎を一心不乱に学びつつ、読書にもいそしんだ。鮎川は大学時代に、後の人生行路に大きな影響を与えた2冊の本に出合っている。一冊は山口高校の教師・丘浅次郎が書いた『進化論講話』である。当時、世界中で話題になっていたダーウィンの進化論をやさしく要約した内容だった。その内容と名文に惚れ込み、何度も読み返した。

もう一冊は、アメリカの鋼鉄王カーネギーの『エンパイア・オブ・ビジネス（実業帝国）』である。鮎川は同書にあった次の言葉に大いに影響された。

君たちを使っているボスが感心できなかったら、一時の損は覚悟のうえでさっさと見切りをつけ去って行け。自分の天分を見抜いて生かしてくれる人に巡り合うまで、くたびれずに転々することだ

大学を卒業する段になり、「三井の番頭」とも言われた井上は三井入りを勧めた。三井に行けば大出世が約束されている。が、鮎川は断った。理由は、先のカーネギーのいうところのボスが好ましい人物ではなかったからである。

鮎川は井上邸の玄関番役だった。そこに出入りする政財界の名士たちがまるで二重人格者だったのだ。鮎川は具体的には触れていないが、おそらく、上、つまり井上にはへいこらする一方、井上のいない場面で、下、つまり玄関番たる鮎川に何かと辛くあたる人が多かったのだろう。

また、その頃、姉妹が名士の家に次々に嫁いだので、上流社会の内幕を赤裸々に知るようになっていた。鮎川はこう書く。

いままで私の金科玉条としていた“立身出世”ははたして正しいのであろうかと。その結論として出たのが「おれは絶対に金持ちになるまい。だが大きな仕事はしてやろう。願わくは人のよく行ない得ないで、しかも社会公益に役立つ方面をきりひらいていこう」

金持ちにはなりたくないから、三井、三菱に行く必要はない。どこに行くか。でも、カーネギーのいう、私が進んで下につきたいというボスがなかなかいない。それならば人に頼るのは止めよう。福沢諭吉のいう独立自尊でいくまでだと、東大出であることも、井上馨を大叔父に持つ由緒ある家柄であることもすべて隠して、一介の職工として社会人のスタートを切ることにしたのである。後に彼はそれを“人生設計の変態方程式”と呼んでいる。大叔父たる井上の勢力や、東京帝大卒業という肩書きと一切関係のないところで、人生の大海原に乗り出すという意味である。

彼はこの決断を後に、次のように振り返っている。

今から四十五年前、一介の貧乏書生として学校を出て実業界にはいる際に、私は自分の人生設計の中に《終生富豪となるなしに天職に精進しよう》というフィロソフィーをおりこみました。そのことは私の青年期において、《富豪心理はおおむね人をして利己的に堕(だ)し人類に好ましからぬ悪徳をやどさせる》もので、それはたいていその人のもつ天賦の才力のすべてを仕事にささげようとする目的の人生設計に対しては、むしろ邪魔になるものだという一種の真理が、幻影のごとく私の眼前に展開したいくたの実例によって証拠立てられ、それが私の脳裏にやきつけられたことに原因する

爾来(じらい)私は身をもってこれを実践して行くうちに《おのれを空(むな)しうすることが、然(しか)らざる場合に得べかりし有体財産（タンジブル・アセット）の幾層倍かの無形財産（インタンジブル・アセット）に値するものである》という信念、換言するとそれによって《人の幾代かを要すると思われる難事業もよく一代でなしとげ得られる》という事業哲理を把握した。私はこのフィロソフィーを私の守り本尊として宗教的に遵奉しながら万事に処してきたつもり

閥をつくるのは人情で、決して罪悪視すべきではないが、同時に《閥は人間の能力の低下を招致し事業発展にブレーキをかける》ということも争えない反応であります。だから私がモノ好きにもこの方程式をなげ打って別個の変態方程式を解こうとかかったのは、さきの人生設計をまともに行なったものであって、これは一個の非人情行為に属するから、私はおのが亜流を他人に押し売りしようとかかったことは一切ないのです

休日は有力工場を見学
海外の技術に関心を持つ

井上に自分の決断を話すと、「そのほうが立派だ」と喜んでくれ、芝浦製作所（今の東芝）に紹介の労をとってくれた。もちろん、井上からは一部の幹部にのみ、鮎川の出自が知らされた。

東京帝国大学工科大学機械科を卒業したのが1903（明治36）年7月で、9月に芝浦製作所に入社する。初任給は日給48銭（1カ月休みなく働いても15円弱）で、仕上げ工という身分であった。当時、工学士の賃金は月給45円はもらえた。

ところがしばらくして鮎川の素性が職場仲間に知られるところとなり、それまでのように気やすく付き合えなくなったので、他の職場に移る。結局、機械、鍛造、板金、組み立てを次々に経験し、最後は鋳物工場で働いた。

そうやって職工として働いているうち、有楽会(うらくかい)なる組織が東京都下の有力工場を視察した「工場巡視録」を目にする機会があった。経済界の普及原因を解明する目的で、井上が渋沢栄一、大倉喜八郎といった有力実業家とつくった組織、それが有楽会だ。工場巡視録の中身は「なかなか発奮させられる内容だった」と鮎川はいう。そこで、数人の仲間とともに、それらに載っていた東京市内

および近郊の工場を毎日曜日に見学する計画を立て、実行した。その数は2年間で70、80にもなった。最初は仲間と出かけたものの、交通手段が未発達だったため徒歩で訪問したところ、仲間が次々に根をあげ、最後は鮎川一人で廻った。

工場見学の結果、こういう結論を得た。「日本で成功している企業は一から十まで西欧の模倣だ。日本独創のものがあっても進歩のあとがない。それは私が取り組んでいる鋳物の分野でもまったく同じだ。このようなありさまでは日本で仕事をする価値がない。外国へ行き勉強してこよう。行く先はアメリカにする。そこで鋼管の製造方法か、可鍛鋳鉄（かたんちゅうてつ）のやり方を学んでこよう」。可鍛鋳鉄とは、鋳造した後に、熱処理を施して炭素分を減らすか黒鉛化して、加工可能性を豊富に持たせた鋳鉄のこと。肉薄で強いため、機械部品に使われ、現在の主たる用途は自動車産業である。

単身アメリカへ渡り
現場で最新技術を身に付ける

鮎川は1905（明治38）年9月に芝浦製作所を退社すると、その年の11月、横浜港からデコタ丸というアメリカ客船に乗り込み、アメリカのシアトルに向かった。

鋼管製造工場は門外不出の技術を扱っているという理由で受け入れを断られた。もう一方の可鍛鋳鉄工場には首尾よく働かせてもらうことができた。バッファロー市郊外のグルド・カプラーという会社の工場である。週給5ドルの見習い工として雇われた。

仕事はきつかった。反射炉から流れ出る真っ赤な溶鉄を取り鍋に受けて、その鍋を両手で抱えながら駆け足で自分の持ち場まで運んできて、鋳型に注ぐ、という作業が一番辛かった。しかも一度ではなく、連続で何度か繰り返すのだ。日本でも同じ作業はあったものの、取り鍋の重さを入れて、せいぜい20キログラム弱であったが、アメリカは倍ほどの重さだった。

日本の芝浦では一人前だった俺も、ここでは半人前以下だ。毎日疲れ切って下宿に帰った。足を火傷もした。鮎川は負けずに頑張り通した。ちょうど日露戦争に日本が勝った直後で、「身体の小さい日本人が大男の露助（ロシア）を倒した」と町中で評判になっていたから、頑張らないわけにはいかなかった。

2週間ほどが経過した時、不思議なことが起こった。アメリカ人並みにやれるようになっていたのだ。急に腕力が増したわけではなくて、力の入れ方などのコツを覚えたからだ、と鮎川は後に振り返る。

この経験が後に生きた。彼が後に日本で興す事業とこの体験は、密接な関係を持ったのである。

後に久原鉱業の社長に就任した鮎川が「私の体験から気づいた日本の尊き資源」と題した講話を行っている。1928（昭和3）年のことである。そこにこの経験を振り返った内容があり、印刷物にもなった。

過去においてこれほど意義のあるまたと得難い体験はない。爾来私は自分の事業上、この体験を生かして信念化した。すなわち、日本人は労働能率において少しも西洋人に劣るものではない。彼らが体格や腕力にすぐれている代わりに、我らは先天的に手先の器用と動作の機敏とコツという特性を持っている。頭も負けない。だから仕事の能率を彼ら以上にあげ得ないことはない。（中略）ご承知の通り国土が狭くてこう人間がふえては、農業立国は成り立たない。天然資源も何一つないとすると、第一次産業は望みがない。列強に伍して行ける方策としてはただただ第二次、第三次の加工工業が残されているのみである。思うに神様は絶対に公平だ。日本は領土や物的資源に恵まれぬ代わりに、世界無比の万能工業人の趣旨を余るほど授かっている。（中略）なお信用さえあれば、外国の資本も流れて来る。それによって原料でも材料でも持てる国から遠慮なく買うことができる。場合によってはより安く。こうして輸出

がさかんになれば、国民の懐も豊かになって、スイスの如く資源の乏しきをかこつ必要がなくなる。故に今後の日本は国是として、全国を工業化して労使協調、勇往邁進すべきである

一方、日本がアメリカのやり方を見習うべきこともあった。鋳物場で砂をすくうショベルの取り扱い方である。鮎川が働いた工場では、一日の仕事が終わると一人ひとりがショベルについた砂をきれいに落とした後、油のついた布巾で全体の湿気を丁寧にぬぐい、所定の場所にかけるようになっていた。ところが鮎川が経験してきた日本の工場では商売道具のショベルをそこまで大切に扱わなかった。磨いたショベルがうまく働いてくれるのは、人間が磨くという行為を通じて、それだけ愛情を注いだからだ。人間の愛情に対する報恩が物に表われる。お金も同じで、それを愛する人を慕って集まるが、粗末に扱う人には寄り付かない。鮎川はショベルの扱い方からも多くを学び取ったのだ。

鮎川は 1907（明治 40）年 2 月、アメリカ滞在 1 年半の予定を終えずに日本に帰った。28 歳になっていた。目的とした技術を手に入れることができ、日本で新たな企業を立ち上げてやっていく経営の自信もついたからであった。

帰国すると、井上馨に鋳物工業の将来性を説明した。自らが身を張って確かめた日本人の労働力としての優秀さも力説した。井上は計画に膝を叩いて賛成し、久原房之助、貝島太助、藤田小太郎といった事業家と、三井に口をきいてくれた。彼らは喜んで出資を約束してくれた。

かくして、1910（明治 43）年 6 月、資本金 30 万円、鮎川が専務兼技師長となった新会社、戸畑鋳物が福岡県下の戸畑（現在の北九州市戸畑区）に設立された。日本初の可鍛鋳鉄製造会社であり、まったくの新規事業。今でいうイノベーションに他ならなかった。

Kagawa

妾の子として生まれ
幼くして父母を失くす

賀川豊彦は 1888（明治 21）年 7 月 10 日、神戸で生まれた。父親は純一といい、神戸に本拠を構えて貨物の海上運送を行う賀川回漕店の社長であった。

純一はもともと政治の世界に身をおいていた。徳島県板野郡大津村で造り酒屋を営んでいた磯部柳五郎の三男で、15 歳の時に、同じく板野郡堀江村で藍玉の製造を家業としていた庄屋、賀川家の養子になった。

純一は、賀川家の長女・みちと夫婦になり家を継いだが、徳島の漢学塾に通った後に政治に目覚め、家業をほったらかしにて国事に奔走。自由民権論をとなえて政治結社・自助社を創設。板垣退助にみとめられて上京し、元老院書記官となったが、自助社社員がおこした政権を脅（おびや）かすような朝憲紊乱（びんらん）な事件に関係して辞職した後、四国に帰り、高松および徳島の支庁長をつとめた。

そのうち、地方でも政治の争いに巻き込まれるのを嫌い、官を辞して実業家として生きることを決意。神戸にて開業したのが賀川回漕店であった。

この間、かめという芸妓とねんごろになり、妾として囲った。教養もある、美しい婦人であった。このかめとの間に、まず長男・瑞一が、次いで次男・豊彦が生まれた。兄弟は 15 歳、年が離れていた。みちとの間にはとうとう子供がなかった。

賀川が 5 歳の時、大きな不幸が彼を襲った。

まず父・純一が、そして母・かめが相次いで病没したのである。二人の間には計 5 人の子供がいた。もう 20 歳に達していた瑞一が賀川回漕店の社長を継ぎ、豊彦と長女の栄は義母、つまり本妻であるみちの家に、他の 2 人は乳母の家に引き取られた。みちは病弱で気難しく、妾の子である豊彦につらく当たった。耐え忍ぶしかなかった。

実家に移った年の 4 月、吉野川の近くに　あ

る第二堀江尋常小学校に入学する。成績はよく、絵も文章もうまく、地域の伝説を物語にしたり、友達と演劇にいそしんだりした。

一家離散を機にキリスト教に入信
社会主義にも共感、非戦論者になる

その後、県立徳島中学に進学する。3年生の時、英語を習う目的で、徳島市内の日本基督教会で開かれていた英語による聖書講読クラスに通ったことが賀川にとって一大転機になった。そこで、クラスを担当していたアメリカ人宣教師C・A・ローガンと、その夫人の弟H・W・マヤス博士のいずれからも大きな人格的教化を得た。特にマヤスは自宅でもクラスを持っていたので、何度も自宅に足を運び、その高潔な人柄に感化された。賀川は後にこう記す。

愛とは何であるかを私に教えてくれた二つの家庭とは、ローガン博士とマヤス博士の家庭であった。私にキリスト教とは何か、特に愛であるということを教えてくれたのは聖書だけではなく、この二つの家庭であった。闘いに敗れ、何処に行くところもないときに、これらの二つの家庭はいつも私のために開かれ、歓迎してくれた。この人たちは私を、自分たちの子供の一人のように育ててくれた

翌1903(明治36)年、新たな悲劇が彼を襲った。兄、瑞一の無軌道な経営と放蕩生活が原因で、賀川回漕店が倒産。賀川家は破産し、広壮な家屋敷も人手に渡ってしまった。賀川は父の弟、すなわち叔父である森徳兵衛の家に寄寓することとなった。

賀川は一家離散という事態に対して悲嘆にくれ、忍び泣きをこらえてマヤス博士宅を訪れた。マヤスは戸外へと彼を導き、その顎に手をあてがい、涙に濡れた彼の顔を太陽のほうに向けながら、こう言って賀川を慰めた。「泣くのを止めて涙を乾かしなさい。泣いている目には太陽も泣いて見え、ほほえむ目には太陽も笑って見えるよ」と。

がしかし、賀川はなかなか入信の決意がつかなかった。叔父がキリスト教嫌いだったこともあり、躊躇(ちゅうちょ)していたのだ。ところがマヤスに「あなたは臆病です」と言われたことがきっかけで、キリストの教えに従う以外に生きる道はないと決意、1904（明治37）年2月21日、マヤスから洗礼を受け、キリスト教に入信する。これが、数多くの社会課題に取り組みながらも、伝道師としての一生を貫いた最初のきっかけであり、彼の一生を決めた出来事でもあった。

中学5年になると賀川の英語力は大きく伸長し、カント、ショーペンハウエル、ヘーゲル、ラスキン、トルストイなどの原著をマヤス博士の本棚から持ち出すと、むさぼり読んだ。

また、縁続きであった同年代の新居格(にいいたる)という人物から、安部磯雄、木下尚江の著作を借り受け、彼らが唱えるキリスト教を基盤においた社会主義に大きな共感を覚えた。安部、木下は片山潜(せん)、幸徳秋水とともに1901（明治34）年に社会民主党を結成するが、即日禁止されていた。

こうした思想書の影響で、賀川は非戦論者になっていた。当時は日露戦争が勃発、日本がロシアに対して優勢で日本全体に戦勝気分がみなぎっていたが、賀川はまるで反対で、中学卒業前に行われた武装野外訓練の際、銃を投げ出して演習参加を拒み、体操教師からひどく殴られている。

明治学院、そして神戸神学校へ
哲学や歴史の洋書を読み漁(あさ)る

1905（明治38）年3月、徳島中学を卒業し、東京の明治学院に入学する。叔父の森徳兵衛がキリスト教嫌いで明治学院への進学を絶対に許さなかったため、森家を自ら飛び出し、マヤス博士に庇護を求めた。

明治学院は、医者にしてキリスト教の伝道師だったジェームズ・C・ヘボンが1863(文久3)年、横浜に開いた英語のヘボン塾に端を発する。正確

には、宣教師ブラウンの神学教育がもとになった「東京一致神学校」、そして、いずれもヘボン塾の後身である「東京一致英和学校」と「英和予備校」という三つの教育機関の合同によって東京・白金に 1886（明治 19）年に誕生した。普通学部、神学部、高等学部の 3 つがあり、1905（明治 38）年 4 月、賀川は神学部予科に入学した。学資はマヤスからの送金でまかなわれた。

賀川は授業に出るよりも図書館にいることを好んだ。哲学および歴史の洋書を中心に、ありとあらゆる書物を読んだ。明治学院には結局 2 年間しか在学しなかったが、おかげで彼の頭は大学教授級の知識を蓄えていた。

1907（明治 40）年になると、ローガン、マヤス両博士が所属するアメリカ南長老教会が神戸に新しい神学校を設立することが決まり、マヤスが賀川に転校を要請。賀川はそれを受け入れ、3 月に明治学院神学部予科を修（お）えると神戸の神学校に移ることにした。

ただし、開校は 9 月だから、それまでには半年という時間がある。それまでの間、知り合いの伝手（つて）で愛知県にある岡崎教会の伝道の仕事を手伝うことにし、その教会に身を寄せた。

ところが、ここでまた新たな出会いが賀川に訪れた。

弱者救済という伝道の理想に接し路傍伝道を開始

町の芝居小屋で、日露戦争の講和条約の内容を批判する演説会が開かれており、賀川も聞きに行ったところ、壇上で政治家の演説が始まるや否や野次や怒号に包まれ、聴衆たちが殴り合いをする始末。賀川はいてもたってもいられなくなり、壇上に飛び上ると、清水次郎長の侠客道とイエスの教えを説き、さらに自らの頭にあった非戦論を堂々とぶった。

このことを岡崎教会の長老は問題視した。飛び入り演説で非戦論を述べたことが咎（とが）められたのだ。賀川は失望し、神戸まで帰る旅費は持っていなかったので、同じ愛知県内の豊橋教会に活動基盤を移そうと決意、徒歩で豊橋まで歩き始める。約 20 キロの道のりであった。

その豊橋教会を管理していたのが長尾巻という牧師である。子供が 10 人もいて、長いひげを蓄えていた。長尾は乞食や身障者といった弱者を愛した。食事を与え、聖書を読んで教えを説き、彼らの幸福のために祈った。賀川はそこに伝道の理想を見た。

賀川は長尾の子供たち 3 人と毎晩連れだって、豊橋の繁華街で路傍伝道を行った。一人の子供が太鼓を叩き、あとの 2 人が讃美歌を歌い、賀川がキリストの教えを説いた。

次々に襲いかかる病苦と深い感銘を受けた一冊の本

ところが無理がたたったのか、その年の 8 月、路傍伝道 41 日目に喀血（かっけつ）し、高熱が出た。それが十数日も続いたため医者にかかったところ、肺壊疽（はいえそ）と診断された。一時は危篤になり、死もやむなし、という状態だった。

長尾牧師の妻と子供たちの必死の看病が実り、賀川は奇跡的に元気を回復する。賀川は篤（あつ）く礼を述べて神戸に行き、マヤスの援助を得て 4 カ月間、神戸と明石の病院に入院した。それでも全快はせず、翌 1908（明治 41）年 1 月から愛知県蒲郡に近い漁村で転地療養をする。粗末な空き家で 9 カ月暮らし、身体はようやく小康状態になった。その間、自伝小説『鳩の真似』を執筆、それが後にベストセラーとなった『死線を越えて』の前編となった。

その年の 9 月、当初の計画から 1 年遅れ、神戸神学校に入学する。

が、彼の身体的苦難は続いた。

今度は蓄膿症にかかり、兵庫県立病院で手術を

受けたところ、出血多量で失神、重態に陥り、マヤスはじめ彼の知人たちは葬式の準備までしたが、今度も不思議なことに命を取り止めた。

それが終わると、今度は結核性痔瘻（じろう）に苦しんだ。こちらは京都大学病院で手術を受け、病勢は弱まった。退院後、京都五条にあった日本基督教会の牧師宅2階での静養中に読んだ、ジョン・ウェスレーの書物に深い感銘を受ける。ウェスレーは18世紀初頭に生まれたイングランド国教会の司祭で、メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導したキリスト者である。この運動から生じたのがメソジスト派というプロテスタントの一派であり、アメリカ合衆国、ヨーロッパ、アジアで大きな勢力を持つに至った。彼は「今を生きよ。現実を改善せよ」という言葉とともに、炭鉱で働く労働者などの社会に見捨てられた人たちへ積極的な伝道を行い、後の労働組合結成や奴隷解放の動きに大きな影響を与えた。この書物を読んだことが、賀川が後にスラムに住み込み、貧しい人たちへの伝道を行う大きなきっかけとなった。

貧しい人々を救うため
死を覚悟して神戸のスラムに住み込む

病気が表面的には癒え、神戸神学校に復学したものの、健康不安は去らなかった。いつ発病するか、という不安にいつも苛（さいな）まれていた。特に怖いのが肺疾患である。当時はそれによってあっけなく人が死んだ。自分も近いうちに死ぬ。長くて3年くらいだろう。だとしたら、ありったけの勇気を奮い、もっと善い生活を送ろう。

彼が選んだのは路傍伝道であった。この年の9月から神戸の葺合（ふきあい）新川にあった貧民窟（スラム）に毎夜通った。そのうち、夜だけ通ったのでは貧しい人たちは本当に救えないと考え、自らの居をスラムに移したのである。1909（明治42）年12月24日、クリスマスイブのことであった。賀川は22歳であった。

葺合新川地区は300メートル平方、約2万7000坪の広さにみすぼらしい長屋が立ち並び、2000世帯、7500人の人々が2畳の長屋に5人も6人も暮らす、当時の日本で一、二を争う大スラムであった。衛生状態も悪く、トイレは20軒に1つしかなく、生まれた乳児の半数が死亡した。

賀川が住んだのは、前年の暮に喧嘩が起こり、男が切られて死んだので幽霊が出ると恐れられ、借り手がつかないという家だった。一日当たり7銭の家賃を月2円で借りることができた。

スラムの現実は賀川の事前の予想をはるかに超えるものであった。貧困や病気は当たり前、喧嘩や恐喝、物乞いは日常茶飯事。賭博、売買春も住人たちの日課であった。なかでも賀川が驚愕したのが「もらい子殺し」であった。住人が一時の金欲しさに生後間もない乳児をもらい受けるものの、栄養失調によって死に至らしめてしまうのである。

なぜもらい子が生まれるのか。女性が不義の子を宿す。妊娠中絶は当時、堕胎罪として7年以下の懲役だったので、それを避けようと分娩はするものの、処置に困ってしまう。そこで、もらい子してくれる人が必要になるのである。

初めは衣類10枚と謝金30円でもらわれて来た子が、次の人に渡る時は10円と衣類3枚、さらにその次には5円と衣類2枚になる。現金が欲しくてもらい子をしている住人も、本気で育てる意思がないから食事がどんどんおろそかになっていき、とうとう栄養失調で死なせてしまうのだ。

新川に移り住んだ翌1910（明治43）年の1年間で賀川が葬式を出した14人中の半数が実に、このもらい子であった。

賀川自身ももらい子をやった。もちろん金欲しさではなく、救済のためである。もらい子殺しの老婆が検挙されたというので警察に赴いたところ、当の老婆が瀕死（ひんし）の赤子を抱いている。次の犠牲者が出るところだったのだ。賀川は学生で未婚、

しかも学校の大事な試験の期間中だったが、見るに見かねてその子を引き取った。彼はお石（いし）というその子供を題材にこんな詩（『涙の二等分』所収）をつくった（部分）

おいしが泣いて、目が醒めて、
お襁褓（むつ）を更（か）へて、乳溶いて、
椅子にもたれて、涙くる
男に飽いて、女になって、
お石を拾ふて、今夜で三晩
夜昼なしに働いて、
一時寝ると、おいしが起こす

弱者自立の事業を興すも 4カ月で挫折

自らの死を覚悟し、短い命を貧しい人々の救済に当てるためにスラムに入ったのに、彼の身体は健康を回復してきた。1年半が経過した1911（明治44）年6月には神戸神学校を無事卒業することができた。

翌1912（明治45）年11月、病人や貧民の世話から一歩踏み出し、彼らに働く機会を与え、なおかつ生活向上に役立つ事業を始めることにした。それが大衆食堂「天国屋」であった。

事業のリーダーは中村栄次郎という男。詐欺師同然の仕事で生計を立てていたが、賀川に会って改心し、正業につくようになっていた。

事業の費用は賀川がすべて負担した。利益分の6割を中村が執（と）って生活費に、4割は賀川が取って救済事業にあてることを決めた。マヤス博士に相談したところ、150円出資してくれたので資本金は潤沢になった。

天国屋は大当たりした。朝から晩まで、客がひっきりなしに訪れた。

ところが問題が起こった。無銭飲食が後を絶たなかったのだ。前金制にすれば防げただろうが、チケットの自動販売機などない時代、余計な人手がいる。

賀川はそれでも店を畳まなかった。天国屋はお金儲けのためにつくった食堂ではない。スラムの住人に安くてうまい食事を供し、中村自身の生活費が出れば儲けものだ、と考えていたのだ。

だが結局、天国屋は翌1913（大正2）年3月、廃業を余儀なくされる。賀川が中村に金を出して店を出させたのなら、自分にも同じくらいの金をよこせと、お門違いの嫉妬心を抱いた同じスラムの男が暴力沙汰を起こしたのだ。これですっかりやる気を失くした中村に代わり、出口という、賀川が新川に来た時に最初の弟子となった男をあてた。

しかし、この出口、経営者となってお金が貯まるや病弱の妻を捨て、近所の人妻と通じて駆け落ちしてしまったのだ。賀川は泣く泣く天国屋の看板を畳まざるを得なかった。

賀川の伝記はこの事件をこう結ぶ。

この経験は彼の生涯において重大なものを彼に与えた。それは人間悪についての認識をいっそう深めたことである。この時まで彼は、人間の苦難と罪悪とをわが身に負い、これを解決するのに「与えること」をもってしようとした。しかし、天国屋経営においては、交換経済を通して、すなわち受けることによって貧しい人びとに接した。その結果、人間の悪を切実に受けたのである

留学先のアメリカでストライキに遭遇 日本で労働組合の結成を志す

翌1914（大正3）年は、彼にとって大きな転機の年となった。アメリカ留学に出発したのだ。その動機は、より広い学問を修め、知識と経験をさらに深めようというものであった。

それにはまず金が必要だ。その前年4月、日本基督教会で伝道師の資格を得て、月額15円が伝道費として支給された。女子神学校の講師も引き受けていた。マヤス、ローガン両博士は渡米費用としてそれぞれ200円を貸してくれた。マヤ

ス博士が「旅費の足しに」と持ってきてくれた翻訳の仕事で 50 円を得た。今までの蓄えを合わせ、留学費用と、後に残る者たち（彼は前年に結婚していた）の面倒をみてもらうお金を確保すると、賀川は 8 月 2 日、友人たちに見送られながら、神戸港からサンフランシスコへ向かう日本郵船・丹波丸の乗客となったのである。

賀川が正式に入学したのはプリンストン神学校である。プリンストンはニューヨークとフィラデルフィアの中間に位置する全米有数の学術都市であり、その中心がプリンストン大学だ。賀川は神学の勉強は既に相当行っていたので、プリンストン大学での聴講を望み、試験を受けてその資格を得ることができた。難しい試験を突破し聴講が許され、実験心理学と数学を熱心に学んだ。

1916（大正 5）年、プリンストン神学校の就学期間が終わった。普通の学生が 4 年かけて取る単位を 2 年で取り、神学士の資格を得た。在学中に支給されていた奨学金がなくなり、虎の子の持参金もそろそろ枯渇しようとしていた。ニューヨークに出て仕事を探し、働いてお金を貯めたら、今度はシカゴ大学で哲学を学ぼうと考えた。すぐにニューヨークに向かった。

そのニューヨークのユダヤ人街で、賀川は衝撃的な光景を目にする。洋服裁縫職工組合に所属する 6 万人の労働者が「パンを与えよ」「首切り反対」「賃金の値上げを」といった色とりどりのプラカードを掲げながら、デモ行進する現場に行き合わせたのだ。それは彼をひどく感動させた。その瞬間、彼は悟ったのである。

これまで自分が命を賭して取り組んできた貧民救済事業は、それ自体、立派で大切なことだ。だが、それはシンボルとしての価値は持つものの、貧民をなくす特効薬にはならない。

本当に貧民をなくすには、労働者が正当な報酬を必ず受け取れる社会をつくることだ。そのために必要なのが労働者の団結だ。資本家を根絶する暴力革命ではなく、富を生産する労働者自らが自分の取り分を公平に受け取ることができる社会を平和的手段によって実現するのだ。それには労働組合しかない。彼はこう書いた。

とても、救済などと云ふても駄目なのだ！労働組合だ！労働組合だ！それは労働者自らの力で自ら救ふより外に道はないのだ！俺は日本に帰って「労働組合から始める！」

小作人組合を組織し自らストを指揮後の、日本での実践の足掛かりになる

彼はアメリカでさらにもう一つ重要な経験をした。夏のアルバイトを終え、首尾よく金を稼いだ賀川は計画通り、シカゴに着いた。シカゴ大学に入り生物学を学ぼうと考えたが、シカゴはどうにも空気が悪い。ひどい咳も出るようになり、肺結核の再発を疑った。賀川は決断した。異国で病気にかかったら大変だ。ここで留学生活を打ち切り、帰国しようと。

ところが日本までの十分な旅費がない。困っていたところ、シカゴ在住の日本人から、ユタ州第二の都市・オグデンにある日本人移民会が書記のできる人間を求めているという話を聞きつけた。オグデンは州都・ソルトレークの北約 50 キロメートルの場所にあった。賀川はオグデンに行ってその職を得、経理や庶務の仕事に従事した。市外の日本人を訪問し安否を確かめたり、日本からの便りを届けたりするのも彼の仕事であった。月給は 50 ドル。

ここで思わぬ事件が勃発した。小作人組合を組織して、ストライキを賀川が指導したのだ。

それは、これから日本で展開しようとしていた労働運動の予行演習とでもいうべき出来事だった。

オグデンの郊外にモルモン教徒の地主が広大な畑を持ち、日本人と白人のモルモン教徒 150 人を使って甜菜（てんさい）（さとう大根）を栽培させていた。地主は悪賢く、日本人と白人が不仲であることにつけこんで小作料を低く抑え、利益を独占してい

た。それを知った賀川が両者の仲を取り持って団結させ、強力な小作人組合を組織し、組合の先頭に立って、甜菜の作付け直前に賃上げ要求のストライキを宣言させたのである。地主は要求を呑むしかなかった。そうしなければその年の作物がゼロになってしまうからだ。

日本人全体で5万円の収入増が実現した。彼らは賀川が何者なのか知らなかったが、「知恵も度胸もある偉い若者だ」と彼を尊崇し、謝礼として100ドルを渡してくれた。スラムでの7年間の苦闘は、若き社会リーダーとしての貫録を既に彼につけさせていたのだろう。

鮎川と賀川は生前、直接の接点はなかったようだ。最後に、二人の後半生を足早に紹介しておきたい。

Ayukawa

潰（つい）えた満州の見果てぬ夢
戦後は中小企業振興に尽力

鮎川がつくった戸畑鋳物は第一次世界大戦を機に大きく業績を伸ばした。

1926（大正15）年12月、義弟（鮎川の妹の夫）・久原房之助率いる久原鉱業の再建を任される。親族に資金援助を頼み、当座の危機をしのぐと社長に就任、久原鉱業を現業部門と本社機構に分離したうえで、本社部分を公開持株会社である日本産業株式会社に組織替えした。

株式を公開して資金を集め、その資金で優良な弱小会社を買収し、その傘下におくというコンツェルン経営は世界恐慌のあおりもあってうまく行かなかったが、満州事変と日本の金本位制離脱が経営好転のきっかけとなる。傘下に膨大な企業を収めることに成功、1937（昭和12）年には三井、三菱に次ぐ事業規模を誇るほどで、「新興財閥」と持てはやされた。1933（昭和8）年には自動車生産にも乗り出している。これが後の日産自動車になる。

鮎川最大の賭けは、満州国政府と関東軍の要請により、日本産業の本社を満州国の首都・新京に移し、社名を満州重工業開発に改めたことだ。

しかし、当初の予想通りには満州国の開発が進まなかったため、撤退を決意、鮎川は満業総裁を退任し、満州から去った。1942（昭和17）年12月のことであった。

終戦を迎えると、日産コンツェルンはGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）によって十大財閥に指定されて解体の対象となり、鮎川も準A級戦犯として巣鴨拘置所に収監される。出所後は中小企業育成に奔走し、日本中小企業政治連盟を結成、自らも参議院選挙に無所属で立候補し、当選する。1957（昭和32）年に中小企業団体法の成立に尽力した。

1967（昭和42）年2月13日、前年春に胆道結石摘出手術をしたあと病後が思わしくなく、入院したまま死去した。享年86であった。

日立製作所、日本油脂、ニチレイ、日立造船ほか、旧日産コンツェルン傘下にあった企業は今でもたくさんあるが、その代表は、何といっても日産自動車である。鮎川いわく「小さなものだけ造っていたのでは、会社の発展は望めない。今後は自動車に賭けよう」と、1933（昭和8）年10月、日本産業と戸畑鋳物との共同出資で、自動車製造株式会社という名前の会社をつくったのが発端だ。これが翌年に日産自動車に改称された。

同社は戦後も生き延び、日本のモータリゼーション化をトヨタ自動車とともに牽引したものの、1999（平成11）年3月、経営不振を打開するため、フランスのルノー社と提携を結び、その傘下に入った。日本人の勤勉性を高く評価し産業界に乗り出した泉下の鮎川が、この事実を知ったらどう思うだろうか。

Kagawa

三たび、ノーベル平和賞候補に
戦後日本は賀川の構想の上にある

一方の賀川である。1917（大正 6）年、アメリカから帰国後、神戸のスラム街に戻り、医師の協力を得て無料の巡回診療を始めた。鈴木文治らが 1912（明治 45）年に結成した労働組合・友愛会に参加して、1919（大正 8）年には鈴木らと関西労働同盟会を結成し、理事長となった。神戸川崎･三菱造船所争議はじめ、関西で 1921（大正 10）年に起きた大規模労働争議を指導したが、争議は敗北。批判を受け止め、以後、労働運動の指導者としての立場を去り、農民運動、反差別運動、協同組合運動に活動の場を移す。

がしかし、そうした場において無政府主義やサンジカリズムを奉じる左派勢力が強まる。それはキリスト教的人間愛に基づく賀川の姿勢とは異なるものだったから、賀川の活動は以後、布教と消費組合活動の 2 つに集約されていった。

戦後も彼の活動は続き、一時は首相候補として名前が挙がるほどだった。世界連邦建設同盟副会長となり、宗派を超えた新日本建設キリスト運動を宣言、国内のみならず海外でも伝道や講演を行い、日本社会党の結党にも参画。日本協同組合同盟を組織し、会長にも就任している。その活動は世界的にも有名で、1939 年、アメリカで発刊された『世界の三聖人』には、シュバイツアー、ガンジーと並んで、賀川が取り挙げられていた。また、1954 年から 3 年連続してノーベル平和賞候補者の一人でもあった。

1959（昭和 34）年 1 月 7 日、関西伝道を終えて四国に向かう途中、心筋梗塞拡張症で倒れ、1960（昭和 35）年 4 月 13 日に没した。享年 73 だった。最後の祈りの言葉はこうだった。「教会を強くしてください。日本を救ってください。世界平和を来たらせてください。主キリストによって、アーメン」。

戦後、労働者保護のための労働三法を筆頭に、貧困者救済の生活保護法、協同組合推進のための消費生活協同組合法、農業協同組合法などが次々に形になった。戦後日本は、賀川の構想の上に存在すると言っていいだろう。

［参考・引用文献］
- 鮎川義介『私の履歴書』日本経済新聞社、1965
- 鮎川義介『五もくめし』ダイヤモンド社、1962
- 小沢親光『鮎川義介伝』山口新聞社、1974
- 小島直記『鮎川義介伝　赤い夕陽の昭和史』日本経営出版会、1967
- 佐々木義彦編『鮎川義介先生追想録』鮎川義介先生追想録編纂刊行会、1968
- 小川國治・小川亜弥子『山口県の教育史』思文閣出版、2000
- 菊地浩之『日本の 15 大財閥』平凡社新書、2009
- 武藤富男『評伝　賀川豊彦』キリスト教新聞社、1981
- 隅谷三喜男『賀川豊彦』岩波現代文庫、2011
- 賀川豊彦『死線を越えて』教養文庫、1983
- 佃実夫『緋の十字架』文和書房、1975
- 阿部志郎ほか『賀川豊彦を知っていますか』教文館、2009
- 賀川豊彦献身 100 周年記念事業神戸プロジェクト実行委員会（企画監修）『劇画　死線を越えて　賀川豊彦がめざした愛と共同の社会』家の光協会、2009
- 『コンサイス日本人名事典』三省堂、2005

ＴＥＸＴ＝荻野進介
イラストレーション＝チカツタケオ